

## 第9講：かんろだい世界への道—目指すものとその道程—

昨年の暮れに今回の講座のタイトルを決めた時には、2年間の「現代社会と天理教」という公開講座のしめくりとして、お道の未来の夢を語るのもよいかと考えておりました。しかるに、大震災後にあまり暢気に夢を語るのも如何なものかと思うようになりましたので、この度は、今現在から未来に向かって、私たちは何をどう考えるべきなのかというテーマでお話をすることにいたします。

さて、そこでまず最初に申したいことは、私たちが震災後について語る時に、いわゆる“クレマー”にならないように注意すべきだということです。ミスを糾弾する、責任を追及するということが常に話の発端になるような論調は、被害者にとっても大いに迷惑であるし、速やかな復興の妨げにもなります。ましてや、お道の教えからすれば、人の欠点・失敗を責めるより、人の努力・働きに感謝することが先になるはずですから、我々は震災後のことを語る時には、どこまでも建設的な前向き話になるように心がけるべしだと思うのであります。

そして、さらに申したいことは、震災の被災者たちが受けられた心の傷は、当事者でなければ本当には分からないことを認識すべしだということです。「がんばろう！がんばろう！」と無神経に言うのは、弱っている人の心にはかえって負担になりますから、空虚ななぐさめの言葉をかけるのを慎まねばならないと申したいのです。

また、この度の大震災では大勢の方がお亡くなりになったことについて、大方の人が「これは過剰に贅沢な生活をしている日本人への神の警鐘である」というようなことを言っていますが、「悪いのは自分たち、被災者のあなた方に落ち度はない」と言われても、被災者にしてみれば、「そうだ、悪いのはあなた方だ」とも「いや、悪いのは私たちです」とも言うわけにいかず、ただ返答に困るだけです。そんな言い方で、亡くなった方や遺族の心が慰められると考えるのも、全くの自己満足に過ぎないと自戒すべしだと思います。

「親子でも、夫婦でも兄弟でも皆心がちがう」といわれ、その心の道としてのいんねんも一人ひとり違います。ですから、「日本人の贅沢への警鐘」などという一つの理由だけで、皆が一度に出直さねばならないなどというのも乱暴な話なのです。たとえば、私たちが身上の平癒を願って“おさづけ”を取り次ぐときでも、一人ひとりの住所、氏名、年齢、病歴を親神様に言上します。それなのに、何千・何万の人の出直について十把一からげの話をするのは、まことに不謹慎なことだと思うのです。親神様は、人間一人ひとりを個別に見てくださっている。それも、その人の今世だけでなく、前生、今生、来生へと続くそれぞれの人生を見通して日々の守護をしてくださっているのです。

出直というものは、どのような状況のものであっても、当人や身近な者には不条理に感じられるものです。しかし、人間にもし自分が何時どのような原因で出直すのか明確に分るようになれば、それこそ毎日をビクビクしながら過ごすことになるでしょう。出直の原因や時期が分からないのが親神様の恩寵であるともいえるのではないのでしょうか。

逆に申せば、私たちが今ここに生きていること自体が奇跡的なことであって、その今ここに親神様のご守護によって生かさ

れ生きている有り難さが心底から納得できれば、何時今生の終わりを迎えても、それを不条理だとは思わずに受け止められるはずなのです。

各人の出直までには一人ひとりのそれぞれの物語があり、いんねんの道があるのです。短くても一生、長くても一生であって、親神様の思召によるそれぞれの生の意味があるのです。それが今すぐに分らなくても、その中、必ず意味があると信じて通るのが信仰なのです。被災地の人々と共に、出直しの教理を掘り下げて、生かされ生きる有難さを感じてもらえるようにすることが、我々の今の責務だと思います。それぞれが節から芽を出す覚悟を持ち、いんねん切り替えの信仰ができるように、をやの思いを世に伝えていかなければならないのです。

さて次に、これからの復興の道筋を具体的にどう考えるべきかについて申しますが、現在の日本は、橋本治という人が、「日本の困難というものは、二酸化炭素の排出量を減らし、原発を造って電力の供給量を増やすこともせず、それでも「工業国」として成り立っていて、第一次産業とのバランスが取れていて、国土が疲弊せずにあるという、近代以降、世界のどの国でもやったことがないことを実現させる—それ以外に復興の道がないということだ。」(橋本治『復興の精神』新潮新書)と言っているように、全く八方ふさがりのような状況です。しかし、だからと言って、私たちは立ち竦んでいるわけにはいきません。肝心なことは、将来をしっかりと見据えて、皆が力を合わせて困難を乗り越えていくことです。その為には、正しい歴史観のもとに未来の目標・目的地をしっかりと見据えて、そこに到る正しい地図を持って、一歩ずつでも前進する覚悟を定めることが大事です。

そのことに関して、加藤尚武(元日本哲学学会委員長)氏は、その著書の中でこれからの世界の課題として、①分を知る—自己充足の根源性を生の意味とする。②未来への責任—自然との調和—エネルギー生産の形態を考える。③定常化社会へのソフトランディング—進歩主義から配分主義へ、発展構造から循環構造への転換を考える、ということをおっしゃっています。(加藤尚武『世紀末の思想』PHP 研究所)

また、飯田照明(天理大学名誉教授)は、「歴史は、全体としてみれば陽気ぐらしへの実現という目標に向かって前進する、目的論的・意志的・直線的・不可逆的な歴史である。他方それは「成人」・「出直」・「生れ替り」という円環的な循環運動をくり返しているものである。しかもそのいずれの場合においても、それは同じものの進行でもまた同じものの反復でもなくたえず向上、発展しつつ循環している。すなわち本教の教義からすれば歴史の方向は、らせん状の輪をえがきながら、目標にむかってだんだんと進歩と発展をとげていくものである。」(飯田照明『だめの教えと他宗教』)と述べていますが、このお二人の意見は、これからの日本及び世界の取るべき道を示唆する地図を作る上で、傾聴に価するものだと思います。このような見解を参考にして、教えに基づいた陽気ぐらしの世界を実現するための確かな“みちおせ”を提示すべきが、この講座の本来の目的であったかと思うのですが、紙面に限りがありますので中途半端なままに終わることをお許し願いたいと存じます。